

聖イグナチオ教会のあゆみ  
～現聖堂献堂25周年記念 略年表～

# 詳細解説

1999  $\Lambda$   $\Omega$  2024



目次

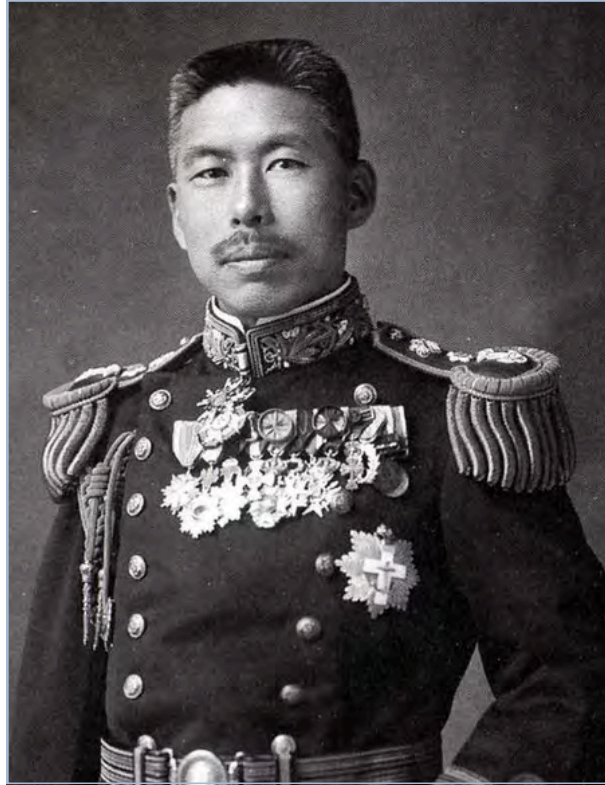
01	山本 信次郎	2
02	岩下壮一神父	3
03	日本天主教教団	4
04	原田健	5
05	聖フランシスコ・ザビエル来朝400年記念式典	6
06	永井隆	9
07	聖体拝領前の断食について	10
08	田中耕太郎	11
09	田口芳五郎	12
10	大泉孝	13
11	教皇ヨハネ・パウロ二世来日	14
12	教皇文書の種類について	15
13	カトリック東京大司教区 宣教協力体のための指針	18
14	北原怜子	19
15	聖年とは？	20
16	マザー・テレサ列聖	21
17	ミッション2030	22
18	東京大司教に菊地司教任命	23
19	ギュンタ・ケルクマン助任司祭 帰天	24
20	佐々木良晴神父 帰天	25
21	イエズス会のペドロ・アルペ元総長の列福調査を開始	26
22	教皇フランシスコ 38年ぶりの訪日	27
23	ブラザー マヌエル・エルナンデス 帰天	31
24	アドルフォ・ニコラス前イエズス会総長 帰天	32
25	岡田武夫名誉大司教 帰天	33
26	名誉教皇ベネディクト16世 帰天	34
27	国際カリタス	35
28	歴代教区長追悼ミサ	36
29	森一弘名誉司教 帰天	37
30	東京教区補佐司教にアンドレア・レンボ神父を任命	38
31	シノドス総会・第1会期終了	39

1937年11月26日

## 山本 信次郎 (やまもと しんじろう)

1877年12月22日-1942年2月28日

海軍軍人。庄太郎・ミツの次男として神奈川県鎌倉郡片瀬村に生れる。1891(明治24)年暁星学校(暁星学園)入学。93年12月24日ヘンリック、Aより受洗、洗礼名ステファヌス。海軍兵学校に進学し、1906年吉原千代子(1855-1929、1912年受洗)と結婚。09年海軍大学を卒業し、東郷平八郎元帥副官、イタリア大使館付武官、第1次世界大戦講和全権委員随員を務める。19(大正8)年東宮御学問所御用掛となり、皇太子の海外巡遊に随行、教皇ベネディクトゥス15世と皇太子の会見の実現にも成功。カトリック信者としては、19年南太平洋諸島布教問題について教皇庁に特派され、問題を解決。



20年公教青年会会長となり(-30)、全国組織へと発展させ(麹町六番町に同会の会館を設立)、22年には万国カトリック青年会に入会。また雑誌「カトリック」(のちの「カトリック研究」)、「カトリックタイムス」(のちの、「カトリック新聞」)を発行し、カトリック出版の基礎を築いた。その他、カトリック研究を行う慶応義塾大学栄誦会の創立を助けたのをはじめ、多くの研究会、修養会に貢献し、政府に対しては、神社問題などの折衝、解決に尽力。また日仏・日伊協会などにも関与し、国際親善に貢献。日中戦争勃発後の38(昭和13)年から1年間ブラジルをはじめ欧米16カ国を訪問、カトリック世界に日本の立場を説明した。その他、諸修道会に有形・無形の貢献をしており、岩下壮一、戸塚文卿が司祭になる時の手助け、妻の千代子らが創立した聖心聖マルグリット会の後身横浜聖母の園の建築への援助、バチカン駐在公使派遣などに尽力。また39年献堂の片瀬教会は山本の自宅の仮聖堂を始まりとする。軍人や要職にある者がキリスト教信仰を公にすることに、非常な勇気と犠牲が必要であった時代に、信仰を貢いだ人物として注目される。今日の信徒使徒職の理想的なあり方を示した。過労により東京で没。

出典:「日本キリスト教歴史人名事典」鈴木範久[監修]日本キリスト教歴史人名事典編集委員会[編]、  
「人物による日本カトリック教会史」池田敏雄

1940年12月3日

## 岩下 壮一 神父 (いわした そういち)

1889 年9 月18 日 - 1940 年12 月3 日



カトリック司祭・哲学者。大正から昭和初期の日本カトリック教会の精神的指導者  
東京大学哲学科を卒業後、文部省在外研究留学生として、パリへ留学 1925 年イタリアで  
司祭叙階

著書には『中世哲学思想史』『アウグスチヌス 神の国』『キリストに倣いて』『カトリックの信仰』『岩下荘一全集 1～9 巻』など

御殿場の神山復生病院院長でハンセン病患者の療養環境の整備に力を尽くした。

出典：霊性センターせせらぎアーカイブ等

1941年5月3日

## 日本天主教教団

カトリック中央協議会の前身として、1940年の宗教団体法の施行により、教会・修道会を包括した組織「日本天主教教団」として1941年に編成され、1945年、宗教法人令の公布、施行により「天主教教区連盟」となり、教区長会議で決定されたことがらを実施し、各教区・修道会・宣教会との連絡調整を果たし、宣教に関する諸問題の相談と指導をその使命としました（1948年に「カトリック教区連盟と改称」）。

そして、1951年の宗教法人法の公布、施行に伴い、1952年「カトリック中央協議会」と改め、戦後の新たな局面と使命を受けて、全国の小教区・修道院などを包括する宗教法人となりました。

1942年3月26日

## 原田 健

同志社大学総長原田助を父に持ち,当初は新渡戸稲造の秘書官として国際連盟にかかわるようになったが,新渡戸が連盟を辞任した後も連盟に残った。彼は日本が1933年に連盟を脱退後も,1938年まで連盟事務局での勤務を続けた。連盟を退いた後はフランス臨時代理公使・参事官(1940/9/26-1941/5/9 および 1942/2/12-4/17),バチカン特命全権公使 1942/4/25-1946/1/26)を務め,戦後日本に帰国後,イタリア大使(1952/10/9-1955/11/9),また1955年からは宮内庁儀典課長を務めている。

出典：篠原初枝「国際連盟の遺産と戦後日本」『アジア太平洋討究』No. 20(February 2013)



# 聖フランシスコ・ザビエル来朝400年記念式典

下記の論文の抄録から記念行事の詳しい内容を知ることができます。

## I. はじめに

第二次世界大戦敗戦から約4年後の1949年6月、日本において、キリスト教の聖人の一人であり、日本にキリスト教を伝来させた人物として知られる聖フランシスコ・ザビエルの渡来400年を記念する行事が行なわれた。1949年当時の日本は、言うまでもなくGHQによる占領期であった。

カトリックはGHQ 統治という社会的状況のもと、宗教界において非常に優位な立場にあったことが推測される。そして、1949年にザビエル渡来400年祭が全国的規模で開催され、世界各国からの巡礼団の来日や、皇



室関係者の参列などもみられ、当時の日本の宗教的・社会的背景の一端を垣間見ることができると。こうした文脈において、本発表では、戦後日本という時間・空間の中で、カトリックの社会的位置づけの変容や、この宗教的行事が持つ意味を検討することが目的となる。また、このザビエル渡来400年祭を通して、非継続的・一時的な宗教行事と場所の関係に注目し、宗教儀礼の場という非日常的空間が、日常の空間において現れたことが当時の社会の中であっていかなる意味を持ち、人々の間で捉えられたかを明らかにしたい。特に、この一連の行事のなかでも、西宮で行なわれた荘厳ミサを中心として考察を進める。

## II. ザビエル渡来400年祭の概要

ザビエル渡来400年祭は、1949年5月29日～6月12日までの二週間にわたり、日本各地で公式式典が執り行われた。この式典に際し、世界各国のカトリック教会から司教レベルの聖職者等からなる巡礼団が来日した。巡礼団の内訳は、オーストラリア・シドニー大司教ノーマン・ギルローイ枢機卿をローマ教皇特使として任命し、巡礼団の団長とした。スペインからは、



## 聖フランシスコ・ザビエル来朝400年記念式典

33名の使節団が、聖フランシスコ・ザビエルの聖腕とともに来日したほか、米国やフィリピン、インドからも使節団が日本に集結した。公式式典にともなう巡礼団の行程は、長崎浦上天主堂廃墟前での荘厳ミサを皮切りに、鹿児島、大分、山口、広島、西宮（荘厳ミサ）、高槻、名古屋、横浜、東京・麹町イグナチオ教会とめぐり、6月12日の明治神宮外苑での荘厳ミサで日程を終えた。ただし、公式式典終了後も、聖フランシスコ・ザビエルの聖腕は、「六月二四日…札幌で崇敬され、函館、青森、盛岡、仙台、福島、山形、秋田、鶴岡、新潟、金沢の各市を三週間にわたって歴訪」し、「訪問することのできなかつた町においても信者は駅へ来て列車の中の聖腕を崇敬したこともあった。そして七月下旬に…静岡、岡山、松江、米子、高松、高知、姫路などで聖腕を数多くの信者に顕示し、各地で熱心な祈りの集まりが行なわれた」ことが記されている。

### III. 西宮球場とメディア・イベント

ザビエル渡来400年祭は、以上のように日本各地をめぐり、なかでも、長崎、西宮、東京においては荘厳ミサが行なわれた。そのなかで、西宮で行われた荘厳ミサに注目すると、会場となった西宮球場では、1937年に球場が完成して以来、様々なイベントが開催されていた。ザビエル渡来400年祭が行なわれた翌年の1950年には、アメリカ博覧会が大々的に開かれた。この博覧会は、朝日新聞社主催、外務省、通産省、建設省、文部省、日本国有鉄道、西宮後援となっているが、事実上は、GHQの全面的なバックアップによって開催された。そして、200万人という大衆動員を成功させたとされている。そこで、重要な役割を果たしたのが、朝日新聞社の積極的宣伝であったことも見逃せない。その前年に催されたザビエル渡来400年祭も同様に、メディア・イベントとして捉えることができる。ザビエル渡来400年祭は、カトリックの聖人を記念する宗教的行事であるが、先述のとおり、GHQが深く関わっており、まさに、「国家や国際機関が主催の場合にも、それが受容されていく過程では、メディアが決定的な役割を果たしていくイベント」として捉えることができよう。



十年祭を先頭に二万五千人の門徒が参加し、皇持前の行列が進行、赤土に集まるのは特設祭壇。  
 西宮球場、前年、朝日新聞社主催、外務省、通産省、建設省、文部省、日本国有鉄道、西宮後援とな

## 聖フランシスコ・ザビエル来朝400年記念式典

### IV. おわりに

以上のように、日本の社会状況が敗戦後の連合軍統治下、日本各地を尋ねた巡礼団の足跡をも含めると、当時の統治者であるGHQの政治的思惑としてのキリスト教化とカトリックの宣教・布教の欲求の合致がみられる。それは、この宗教的行事が、聖フランシスコ・ザビエルの功績を讃える意味とは別に、「平和・復興の祈り」という意味がこめられている点にも読み取ることができよう。

1951年5月1日

## 永井 隆 (ながい たかし)

1908年2月3日 - 1951年5月1日

医師、被爆したカトリック信徒。鳥根県松江に生れる。松江高等学校を経て長崎医科大学に入り、医大卒業後も母校に残って放射線医学を専攻。間もなく熱心なカトリック信徒森山みどりと結婚、妻の感化で洗礼を受け、聖ヴィンセンシオ布教宣教会会員となる。1937(昭和12)年軍医中尉となり第5師団衛生隊医長として日中戦争に従軍、敵味方の区別なく治療に当たった。40年3月帰還して長崎医大教授に就任。戦時中に直光下でX線撮影の仕事をしたため、45年5月頃白血病にかかり、あと3年の命と診断される。同年8月の長崎原爆投下後は、自分の負傷をかえりみず他の被爆者の治療のほか、死体捜し、火葬に当り、妻の遺骨も自らの手で埋葬した。



その後も被爆患者の身をおして、他の被爆者の治療を続けながら細かく原爆症を観察研究。46年11月白血病で動けなくなると、浦上教会(浦上天主堂)の信徒たちが寄贈した小屋<如己堂>(にょこどう)に愛児2人と住み、『いとし子よ』(48)、『亡びぬものを』(48)、『この子を残して』(48)、『花咲く丘』(49)など数々の名作を発表し、永井の記録から<長崎の鐘>という映画や歌が作られて大きな反響を呼んだ。また原爆被災地の子供のために設けた<うちの本箱>は、長崎市により永井記念図書館として運営されている。また83年に「この子を残して」が映画化された。

出典：「日本キリスト教歴史人名事典」鈴木範久 [監修] 日本キリスト教歴史人名事典編集委員会 [編]  
wikipedia 掲

## 聖体拝領前の断食について

断食は新約聖書の中で、主を探す、あるいは主を求める行為として描かれています。そこから教会は断食を福音への回心のしるしと考えてきました。教会の伝統は、「祈り」・「断食」・「施し」を回心と一体のものともみなしています。

ところで、聖体拝領の前に断食をするのは、聖体の姿で人間の中に来られるキリストへの尊敬のため、またキリストに集中するためであると考えられます。

三世紀の記録には、聖体を拝領する前に他の食物を摂らないように、という指示があります。これを四世紀末の教会会議は勧告として宣言しました。それがやがて規定として広まり、中世になると一般化していきます。

断食の時間については、聖体拝領する前夜零時から一切のものを口にしないというものでした。断食ができなかった場合、司祭であればミサを献げることばかりかミサの献げられている聖堂の中に居ることさえ禁じられた時期もあったようです。

一九五三年に教皇ピオ十二世は断食の規定を緩和し、病人や高齢者の免除規定を定め、また、水は断食を妨げないことを明言しました。これにより、食物とアルコール飲料は三時間、アルコール以外の飲み物は一時間、断つことになりました。時間の計り方は、司祭はミサの始まる時間から、信徒は聖体拝領の時間からさかのぼるようなものでした。これについては翌年、司祭も信徒も聖体拝領の時間を起点にすると改められています。

一九六四年十一月二十一日、第二バチカン公会議の期間中に、教皇パウロ六世は新しい断食の規定を公にし、司祭も信徒も聖体拝領の一時間前から、水と薬を除いて飲食を控えることが定められました。また一時間前までは節度を保つならばアルコール飲料も認められることになりました。この規定は翌年、文書でも確認されました。

現在、聖体拝領前の断食については教会法919条で規定されています。前記の内容の他に、二回目あるいは三回目のミサを献げる司祭、および病者や高齢者とその看護者は、何かを摂取してから一時間の余裕がなくても聖体を拝領することができると明記されています。

(『家庭の友』7月号より転載)

1959年4月19日

## 田中 耕太郎 (たなか こうたろう)

1890年10月25日 - 1974年3月1日



法学者。大正4(1915)年東京帝大法科大学卒業後、内務省に入るが、翌年辞職。8年欧米に留学し、帰国して12年東京帝大教授となる。商法を担当し、カトリックの自然法論の立場から世界法を論じた

論文「世界法の理論」で、法学博士の学位を取得。昭和12(1937)年東京帝大法学部長、20年文部省学校教育局長、21年第1次吉田内閣の文相を歴任する。22年参議院議員に当選、25年第2代最高裁判所長官に就任し、10年間在任。35年文化勲章受章、同年国際司法裁判所判事に就任。

出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」



## 田口 芳五郎 (たぐち よしごろう)

1902年7月20日 - 1978年2月23日

カトリック大阪教区第5代司教、枢機卿。長崎県将 彼 杵郡黒崎村出津(しつ)に生れる。洗礼名パウロ。

(大正11)年暁星中学(暁星学園)卒業後、東京大神学校に入学。翌年ローマのプロパガンタ大学哲学部に入学し、25年7月哲学博士の学位を取得。28年12月22日ラテラノ大聖堂で司祭叙階。次いで神学部に進み、29年7月神学博士、更にアポリナーレ法科大学に学び、31年7月ローマ法・教会法により法学博士の学位を取得。同(昭和6)年11月に帰国し、カトリック中央出版部の編集部総主任(32年7月社長)となり、『声』、『カトリック』両誌の編集を担当した。33年1月印刷工場が出版部北隣に完成すると、日本カトリック新聞(『カトリック新聞』)をはじめ各種出版物をも発行し、新聞の社説・論説の執筆や単行本『真理之本源』改訂版、カトリック的国家観』等の著作に活躍。かたわら36年3月-38年4月 麴町教会初代主任司祭を兼任。英・仏・伊語に堪能で、34年3-12月には満州国・教皇庁代理使節と政府当局との交渉に顧問として出向。36年2月マニラでの第33回国際聖体大会に日本参加団80余名の団長として出席。37年10月から翌年2月まで親善使節として渡華。38年2月教皇使節。マレラ、P.の秘書となり、39年4月公布の宗教団体法の下で、殉教を覚悟しつつも巧みに文部省や軍部との折衝を続け、41年5月キリスト教会として初めて日本天主教教団が認可、教団総務および出版部長に就任。一方、39年9月から東京公教大神学校教授として聖会法を担当。40年11月大阪司教兼四国知牧に任命され、翌年12月14日大阪司教に祝聖される。42年1-11月日本政府から、フィリピンに派遣されて日本軍と現地教会当局との融和に尽力。45年4-8月海軍に応召。戦後は日本カトリック教会全体の復興と大阪教区の発展に多くの功績を残した。48年大阪聖ヨゼフ布教修道女会創立、53年大阪にガラシア病院新設、60年第2バチカン公会議準備委員、引続き公会議に参加。その間、62年英知短期大学を開設、63年英知大学(英知学院)を開設して両校の初代学長に就任。同年3月大阪カテドラル聖マリア大聖堂(玉造教会)完成。同年12月四国知牧兼任を解かれた。73年3月5日、教皇パウルス6世により日本人としては2人目の枢機卿に親任された。



大阪聖ヨゼフ宣教修道女会HP 掲載

出典：「日本キリスト教歴史人名事典」鈴木範久〔監修〕日本キリスト教歴史人名事典編集委員会〔編〕



1973年4月29日

## 大泉 孝 (おおいずみ たかし)

1902年4月12日－1978年9月7日

イエズス会司祭、教育者。宮城県柴田郡大河原町の篤信のカトリック信徒の家生れ、幼児洗礼を受けた。洗礼名フランシスコ・ザビエル。柴田農林学校から宮城農学校獣医科に進み、仙台市畳屋町教会構内で自炊生活をしていた時、パリ外国宣教会宣教師モンタグ、L.から深い感化を受けた。農学校卒業後、獣医として釜山に渡ったが、発心して1924(大正13)年上智大学(上智学院)に入学し、哲学科に進んだ。28(昭和3)年イエズス会に入会。ドイツのエンメリッヒ・ボニファチオ学院でラテン・ギリシア・ドイツ文学を研究。29年オランダのファルケンブルヒ大学に入学し、31年卒業後も同大学で倫理学を研究。33年英国ヒトロップ大学に入学、35年卒業。その間34年7月司祭に叙階。日本帰国と同時に上智大学教授となり、翌年同大学理事、以後総長事務取扱、副学長を経て51年学院理事長、53年大学長に就任。また42年大学基準協会理事、大学設置審議会委員、57年同会長、59年大学基準協会会長、66年私立学校振興会会長、72年中央教育審議会会長、75年私立大学連盟会長など、戦後の教育界に大きな足跡を残した。著書に『宗教概論』、訳書に『聖イグナシオ・デ・ロヨラ伝』(69)、「ブルンナー哲学概論」などがある。



学校法人 上智学院 SOPHIA 未来募金 掲載

出典：「日本キリスト教歴史人名事典」鈴木範久〔監修〕日本キリスト教歴史人名事典編集委員会〔編〕

1981年2月23日～2月26日

## 教皇ヨハネ・パウロ二世来日

1981年2月23日～26日教皇ヨハネ・パウロ二世が教皇としてはじめて日本を訪問されました。東京、広島、長崎を訪問した教皇の言葉は、カトリック教会はもちろんのこと、日本の多くの人たちに大きな感銘を与えました。特に、全世界に向けて発せられた広島での「平和メッセージ」は、平和の巡礼者としてのその使命を表すこととなり、今でも人々の記憶に残されています。



出典：カトリック中央協議会HP

# 教皇文書の種類について

カトリック中央協議会HPには1981年以降のすべての教皇文書が記載されています。文書の種類について、下記のとおりとされています。

教皇ローマ教皇や教皇の委任を受けた代理者が直接表明する公式な見解を、一般に「教皇文書」と呼びます。「教皇文書」には、その内容や対象による区分がありますが、その区分は長い歴史の中で変遷を重ねています。ここでは日本語訳のある「教皇文書」をいくつか挙げて、それぞれを簡単に解説します（主に『新カトリック大事典』＝研究社＝を参考にしています）。

## 01 回勅

“Litterae encyclicae”

教皇が信者の信仰生活を指導することなどを目的に、通常は全カトリック教会にあてて送る書簡です。重要度の高い教書で、多くの場合は本文冒頭の数語が文書のタイトルになります。最近の教皇には以下のような回勅があります。

- ヨハネ・パウロ2世 『いのちの福音』 (EVANGELIUM VITAE)
- ベネディクト16世 『神は愛』 (DEUS CARITAS EST)
- フランシスコ 『ラウダート・シ——ともに暮らす家を大切に』 (LAUDATO SI')

## 02 教皇自発教令

“Motu Proprio”

教皇がまったく任意で発布する教令で、使徒的書簡（別項参照）の形式で発布されます。比較的重要な問題を扱い、ほとんどは法的な性格を有します。例として以下のようなものがあります。

- 教皇フランシスコ 『寛容な裁判官、主イエス』 教会法典の婚姻無効訴訟の改正（2015年9月8日付）

## 教皇文書の種類について

### 03 大勅書 “bulla”

もっとも荘厳な書式の書簡で、聖年の公布や列聖、教区新設、司教任命など重要事項の発表などに用いられます。なお小勅書という形式もあります。以下に挙げる例は教皇フランシスコによるものです。

- いくしみの特別聖年公布の大勅書『イエス・キリスト、父のいくしみのみ顔』（2015年4月11日付）

### 04 使徒的勸告 “Adhortatio apostolica”

教皇が聖職者、修道者、司教などに向けて、霊的生活のある面で進歩するよう勇気づけるために送る勸告です。法的文書ではありません。第二バチカン公会議以後は、世界代表司教会議（シノドス）後に、その最終報告の内容を受けた使徒的勸告が公布されることが慣例となっています。以下のものなどがあります：

- 教皇フランシスコ『福音の喜び』（EVANGELII GAUDIUM／2013年11月24日付）

### 05 使徒的書簡 “Litterae apostolicae”

教皇の公的な書簡。教会の要職にある人や特定の団体にあてたあいさつが多いのですが、教皇フランシスコが「いくしみの特別聖年」を閉じるにあたって発表した「あわれみあるかたと、あわれな女」（2016年11月20日付）のように、全教会にあてたものもあります。ヨハネ・パウロ2世は、そうした使徒的書簡を数多く公布していますが（『主の日』『女性の尊厳と使命』など）、ベネディクト16世にはその例がありません。

## 教皇文書の種類について

### 06 使徒憲章 “constitutio apostolica”

教皇が最高権威者として自分の名前で発布する公文書の一つです。自発教令（別項参照）は書簡形式ですが、使徒憲章は荘厳な様式で発布されます。内容も教理上や教会規律上などの特別に重大な問題を取り扱い、全教会もしくはその大部分を適応対象としています。

聖ヨハネ・パウロ二世が教皇の空位と教皇選挙に関して発布した『ユニヴェルジ・ドミニチ・グレジス』（1996年2月22日）や、カトリック新教会法典公布の際の『サクレ・ディシプリーネ・レージェス』、同じく『カトリック教会のカテキズム』公布の際の『ゆだねられた信仰の遺産』などがあります。

## カトリック東京大司教区 宣教協力体のための指針

[略年表へ戻る](#)

東京教区では小教区再編成の最初の段階として、2003年復活祭（4月20日）から宣教協力体を発足させました。その課題は、司祭同士のチームワーク、司祭と信徒・修道者のチームワークを促進し、信徒が参加できる教会をつくっていくことです。司祭不足という問題への対処や信徒の参加を促進する目的でもありました。詳細は以下のアドレスからご覧いただけます。

<https://tokyo.catholic.jp/library/l2/20072/>



## 北原 怜子 (きたらはら さとこ)

[略年表へ戻る](#)



カトリック生活2015年9月号

「蟻の町のマリア」の名で知られる北原怜子さんは、戦後、ゼノ・ゼプロフスキー修道士（コンベンツアル聖フランシスコ修道会）と出会い、東京の言(こと)問(とい)橋近くにあった蟻の町と呼ばれる、廃品回収業に携わる人たちのところを訪れるようになった。そこで子どもたちの世話や廃品回収をするなどしたが、結核により1958年、28歳で帰天した。蟻の町はその後、枝川（現在の潮見）に移転。潮見教会は「蟻の町のマリア」にささげられている。

## 聖年とは？

[略年表へ戻る](#)

旧約聖書のレビ記（25章1節\_55節）に登場する、50年ごとにめぐってくる土地の安息、負債の免除、奴隷の解放という「ヨベルの年」を背景にして、教会が呼びかける回心と罪のゆるしと新たな旅立ちの時である。

教会の歴史に残る最初の聖年は、教皇ボニファティウス8世の命によって、1300年に行われ、100年ごとに聖年を祝うこととなった。その後、聖年を祝う間隔は50年、25年と短縮されてきた。

25年ごとに行われる聖年の他に、特別聖年があり、今回の「いつくしみの特別聖年」はこれにあたる。近年では、1983年に「あがないの特別聖年」が、当時の教皇ヨハネ・パウロ2世の呼びかけによって、行われた。



## マザー・テレサ列聖

[略年表へ戻る](#)

マザー・テレサは1910年、現在のマケドニア・スコピエ生まれ。学校教育を行う女子修道会に入会。インド・コルカタで教員をする中、同地のより貧しい人々と働く呼びかけを受け、こうした活動に専心するようになりました。さらに「神の愛の宣教者会」を創設し、長年、最も過酷で貧しい人々のために世界中で働き、その後継者たちを育ててきました。

1997年に亡くなったのち、2003年10月19日に、教皇ヨハネ・パウロ2世によって列福されました。昨年12月には、脳しゅうようを患っていたブラジル人男性の回復が、教皇フランシスコによって2つ目の奇跡として認められ、列聖が決定。



出典：カトリック中央評議会HP

# ミッション2030

[略年表へ戻る](#)

私たち聖イグナチオ教会は、祈りに基づく使徒的共同体を生きていきます。現代の社会は、命の軽視や孤独、過度の競争原理や格差、環境破壊など、未来に希望を見出しにくい反福音的なものに脅かされています。それに対して、私たちは自分たちの殻に閉じこもることなく、いつくしみの扉を開いていきます。私たちは、同伴者イエス・キリストと心を合わせて、貧しい人や弱い人の声を聴き、皆でともに手をたずさえて（日本人も外国人も、老いも若きも）、福音の喜びを分かち合っていく使命を生きていきます。

## ミッション2030 4つの柱

01



### 祈りを深める

自らの召命をしっかりと受けとめ信仰と生活を統合し、キリストの使徒として生きるため、神との生きた交わりを深め霊的養成（聖イグナチオの霊操に基づいて）を心がける。

02



### 福音を伝える

社会全体の福音化をめざして、どんなところ（教会・職場・家庭など）においても、共同体として、また個人として、仕える心で、与えられた使命を果たしていく。

03



### 共同体を生きる

この教会が誰にとっても「わが家」であると思えるように、どんな人も迎え入れ、互いに支え合いながら、つながりを大切にしていく。

04



### 新しい協働をすすめる

以上を実現していくために、信徒がより主体的になり、司祭、修道者とよりいっそう協力できる体制を構築していく。さらに、イエズス会の教会としてのアイデンティティを保ち、東京教区の一員として連携していく。

上記の活動記録は下記の教会HPからすべてご覧になれます。

<https://www.ignatius.gr.jp/mission2030/mission2030.html>

# 東京大司教に菊地司教任命

[略年表へ戻る](#)

## タルチシオ菊地功大司教 略歴

- **1958年11月1日**  
岩手県宮古市生まれ。
- **1986年3月15日**  
司祭叙階  
その後94年まで宣教師として  
西アフリカのガーナに派遣  
帰国後、神言会の役職に就く。
- **2004年5月14日**  
新潟司教に任命
- **2004年9月20日**  
司教叙階
- **2017年10月25日**  
東京大司教に任命



# ギュンタ・ケルクマン 助任司祭 帰天

[略年表へ戻る](#)



Fr. Günther Kerkmann, S.J.  
1942～2018

- 1942年10月26日  
ドイツ、ミュンスター生まれ
- 1963年4月26日  
イエズス会入会(ドイツ)
- 1967年8月29日  
来日
- 1974年3月16日  
司祭叙階
- 1978年8月31日  
最終誓願(六甲学院)
- 1997年～2003年  
六甲学院で教える
- 1997年～2003年  
泰星学園で教える
- 2003年～2010年  
聖カピタニオ女子高等学校校長(瀬戸市)
- 2010年～2011年  
管区本部会計担当補佐
- 2011年～2016年  
管区本部会計担当
- 2016年～2017年  
管区本部会計担当補佐
- 2017年～  
聖イグナチオ教会助任
- 2018年5月15日  
帰天



# 佐々木良晴神父 帰天

[略年表へ戻る](#)

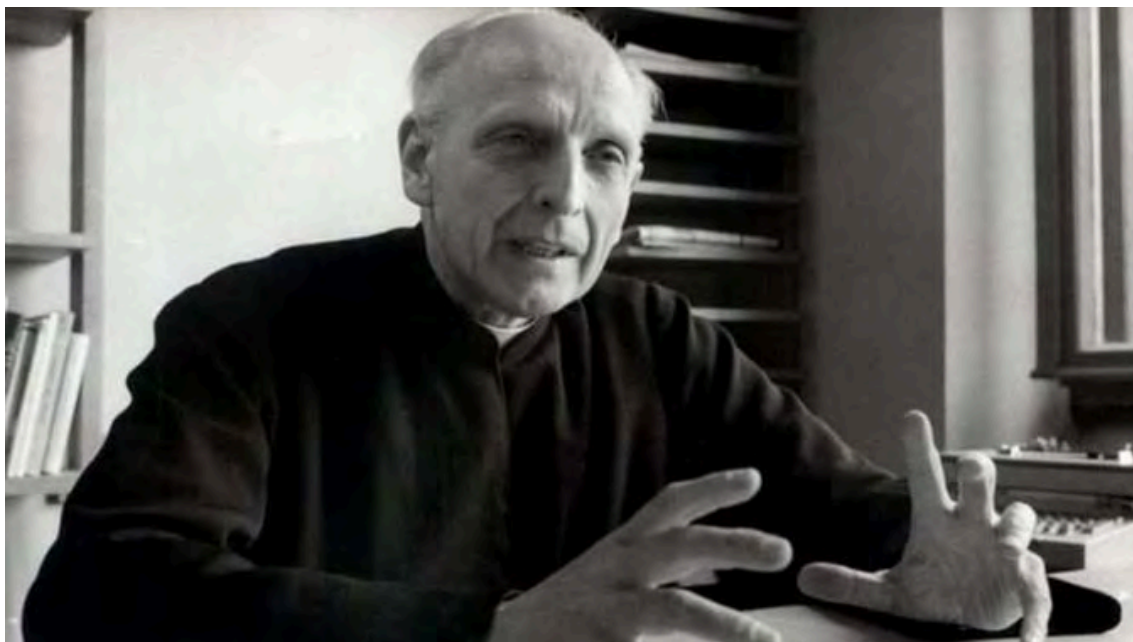


アジジのフランシスコ  
佐々木 良晴 S.J.  
1942～2018

- 1942年6月15日  
ソウル生まれ
- 1967年3月18日  
イエズス会入会
- 1979年12月2日  
司祭叙階(山口)
- 1984年2月2日  
最終誓願(六甲)
- 1978年～1981年  
山口教会、サビエル学生センター
- 1982年～1993年  
六甲教会助任
- 1993年～1998年  
祇園教会主任(広島)
- 1998年～2005年  
徳山教会担当司祭
- 2010年～2011年  
山口島根地区長
- 2012年～2018  
麴町(聖イグナチオ)教会主任
- 2018年4月～  
療養
- 2018年5月23日  
帰天

## イエズス会のペドロ・アルペ元総長の列福調査を開始

[略年表へ戻る](#)



ペドロ・アルペ神父（1907－1991）は、スペイン・バスク州のビルバオに生まれた。マドリード大学・医学部で学ぶ。1927年、イエズス会に入会。1936年、司祭叙階。1938年、宣教師として来日。

1942年より広島の高尾修練院の修練長となり、1945年に同地で原爆を体験。その時、医学の知識を生かし、被爆者の救援・介護に尽くした。1954年、イエズス会日本準管区の準管区長。日本管区が誕生した1958年、初代の管区長となり、1965年までその任にあった。1965年、イエズス会の総長に選ばれた。1981年、病に倒れ、1983年、総長を引退。その後、祈りの生活をおくり、1991年、ローマで亡くなった。

出典：バチカンニュース

# 教皇フランシスコ 38年ぶりの訪日

[略年表へ戻る](#)



東京ドームで行われたミサは、多言語の式文、聖歌が取り入れられた国際的なミサで行われた。



東京教区ニュース第368号から

# 教皇フランシスコ 38年ぶりの訪日

パパさまのお言葉抄

[略年表へ戻る](#)

2019年

フランシスコ教皇滞日行程

教皇メッセージと祈り(抜粋)

11/18 来日前ビデオメッセージ 「訪日テーマは『すべてのいのちを守るため』です」

11/23 タ、教皇庁大使館到着 (当教会信徒100人でお迎え)

11/24 長崎爆心地公園 「教会は人々と国家間の平和の実現に向けて不退転の決意を固めています。それは神と地上のあらゆる人に対する責務です。祈り、一致促進の探求、対話への粘り強い招きが私たちの武器でありますよう(こ。命の文化、赦しの文化、兄弟愛の文化が勝利を収めるよう毎日心一つに祈って下さい」

日本26聖人殉教者記念碑 「日本の教会が、十字架上の聖パウロ三木の言葉に耳を傾け、道、真理、命ある福音の喜びを全ての人と分かち合うよう招かれていると感じますように」

教皇ミサ (長崎県宮野球場) 福音朗読ルカ23:35～43 「天の国は将来の目標だけではありません。今日からそれを生きるのです。病気や障がいのある人、高齢者や見捨てられた人、彼らは皆キリストの生きる秘跡です。彼らにあの方の姿を見出すのです。カルバリの丘では大勢が嘲笑し、盗人だけが罪なき方を擁護できました。私たち一人ひとりが決断するのです。沈黙か、嘲笑か、告げ知らせるかを」

平和のための集い (広島平和記念公園) 「原子力の戦争目的の使用は、神の裁きを受けることになります。真の平和とは、非武装以外にありえません。歴史から学ばなければなりません。思い出し、共に歩み、守ること。この三つには、平和となる真の道を切り開く力があります。記憶は正義(こかない、兄弟愛に溢れる将来を築く保証です。私たちの時代に平和が来ますように。主よ、急いで来て下さい。私たちをあなたの平和の道具として下さい」

# 教皇フランシスコ 38年ぶりの訪日

パパさまのお言葉抄

[略年表へ戻る](#)

2019年

フランシスコ教皇滞日行程

教皇メッセージと祈り(抜粋)

11/25

**大震災被災者との集い**  
(半蔵門)

「一歩踏み出せば、一歩前(こ進みます。皆さん、毎日少しずつでも前に進みましょう。これから生まれる世代のためです。悪の一つは無関心の文化です。飾らない姿勢で被災者(こ尽くした皆さんに感謝と賛美を致します。そうした思いやりが、未来(こ希望と安定と安心を皆が得る道のりとなりますように)」

**青年との集い**  
(東京カテドラル)

「人類にとって大切なのは、皆が同じようになることではなく、友情を育み、他人の不安に関心を寄せ、異なる経験や見方を尊重することです。学校でのいじめでは、いじめる側こそ本当は弱虫です。皆で力を合わせて言う必要があります。もうやめよう!と。友人間で立ち上がる以上に強力な武器はありません。恐れは常に善の敵です。イエスは『恐れることはない』と言われました。神の愛、兄弟姉妹への愛は恐れを締め出すからです」

**教皇ミサ**  
(東京ドーム)

福音書マタイ6：24～34「日本は、経済的には高度に発展した社会ですが、孤立した人少なくなき、社会からはみだしていると感じています。多くの人々が当惑し不安を感じています。主の言葉が鳴り響きます。『くよくよせず、信頼しなさい』と。三度強く仰せになります。『自分の命のことで思い悩むな。明日のことまで思い悩むな』。心を開き、主と同じ方向に目を向けるようにとの励ましです。『何よりも神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものは全て加えて与えられる』。利己主義は、巧妙に私たちに不幸な奴隷にします。孤立に抗しうるものは、分かち合い、祝し合い、交わる、これしかありません」



# 教皇フランシスコ 38年ぶりの訪日

パパさまのお言葉抄

[略年表へ戻る](#)

2019年 フランシスコ教皇滞日行程

教皇メッセージと祈り(抜粋)

11/26 上智大学

「大学で準備された教育の単なる受け手でなく、若者も一翼を担い未来の展望や希望を分かち合わねばなりません。皆さんがその模範となりそこから生まれる豊かさや活力で知られる大学となりますように。みなさんは公正、人間的、正直で責任をもつことを心がけ、弱者を守る人になって下さい。偽りの欺瞞の時代にあって特に必要とされる誠実な人になって下さい。良質な大学での勉学は少数の特権でなく、公正と共通善に奉仕するとの自覚を伴うべきです。貧しい人たちのことを忘れてはいけません。主と、教会は、皆さんが神の叡智を求め、見出し、広め、社会に喜びと希望をもたらすことをあてにしています。助けを求める人のために祈ることを忘れずにいてください。これからも私の祈り、私の心には、常に皆さんがいます」

午前、離日





## ブラザー マヌエル・エルナンデス 帰天

[略年表へ戻る](#)



- **1931年1月9日**  
スペイン・サラゴサ生まれ
- **1950年5月16日**  
イエズス会入会（スペイン、ロヨラ）
- **1955年8月6日**  
来日
- **1961年2月2日**  
最終誓願
- **1955年～1959年**  
横須賀修道院（栄光学園内）
- **1959年～1962年**  
長束修道院
- **1963年～**  
教誨師、篤志面接委員
- **1962年～1981年**  
横須賀修道院、鎌倉修道院（十二所）
- **1995年**  
藍綬褒章受章
- **2007年**  
瑞宝双光章受章
- **1981年～2015年**  
カトリック麴町教会（聖イグナチオ教会）  
などで司牧・教誨師
- **2015年～**  
イエズス会・上石神井修道院
- **2019年6月30日**  
『信望愛 — 六十五年を日本で生きて —』  
著書完成
- **2019年11月28日**  
帰天（上石神井修道院）

# アドルフォ・ニコラス前イエズス会総長 帰天

[略年表へ戻る](#)



- **1936年4月29日**  
スペイン、パレンシア生まれ
- **1953年9月14日**  
イエズス会入会(スペイン、アランフェス)
- **1961年2月26日**  
来日
- **1967年3月17日**  
司祭叙階(東京)
- **1971年～1978年**  
上智大学で神学を教える
- **1978年～1984年**  
東アジア司牧研究所(EAPI)所長(マニラ)
- **1985年～1993年**  
上智大学で神学を教える
- **1991年～1993年**  
イエズス会神学院院長(上石神井)
- **1993年～999年**  
イエズス会日本管区長
- **2000年～2004年**  
カトリック東京国関5センター(CTIC)のチームメンバー
- **2004年～2007年**  
イエズス会東アジア・オセアニア地域協議会議長
- **2008年～2016年**  
イエズス会総長
- **2017年～2018年**  
アルペ国際レジデンス(マニラ)
- **2018年8月～**  
イエズス会ロヨラハウス(東京)
- **2020年5月20日**  
帰天(東京)

# 岡田武夫名誉大司教 帰天

[略年表へ戻る](#)

## ペトロ岡田武夫名誉大司教 略歴



- 1941年10月24日  
千葉県市原市鶴舞にて誕生
- 1963年12月24日  
カトリックへ改宗（上智大学学生会館チャペル）
- 1973年11月 3日  
司祭叙階
- 1974年4月～11月  
船橋教会助任司祭
- 1974年11月～1975年 4月  
西千葉教会主任代行
- 1975年～1979年  
留学（ローマ）
- 1979年 4月～1986年  
柏教会主任司祭
- 1986年 1月～1991年 8月  
日本カトリック宣教研究所所長
- 1991年 4月15日  
浦和教区司教に任命
- 1991年 9月16日  
司教叙階
- 2000年 5月13日  
東京教区大司教に任命
- 2000年 9月 3日  
東京教区大司教として着座
- 2013年 7月27日  
さいたま教区管理者に任命（兼務）
- 2017年10月25日  
東京大司教引退が受理
- 2018年 6月 2日  
さいたま教区管理者解任
- 2019年 4月～2020年 6月  
本郷教会小教区管理者
- 2020年12月18日  
帰天

# 名誉教皇ベネディクト16世 帰天

[略年表へ戻る](#)

## (ヨーゼフ・アロイジウス・ラッツィンガー) 略歴



- **1927年 4月16日**  
ドイツバイエルン州に生まれる
- **1951年 6月29日**  
司祭叙階
- **1977年 5月28日**  
司教叙階
- **1977年 6月27日**  
パウロ6世により枢機卿親任
- **1981年11月25日**  
教皇ヨハネ・パウロ2世により教皇庁教理省  
長官、聖書委員会・国際神学員会委員長に  
任命される
- **2002年11月30日**  
首席枢機卿となる
- **2005年 4月19日**  
第265代教皇に選出され、ベネディクト16  
世を名乗る  
ドイツ人の教皇選出は、ヴィクトル二世  
(在位1055～1057年) 以来950年ぶり
- **2013年 2月28日**  
教皇退位
- **2022年12月31日**  
帰天

# 国際カリタス

[略年表へ戻る](#)

国際カリタスは世界各国・地域の司教協議会によって認められている「カリタス（愛）」の活動を行う団体による連盟組織。国際社会では国際赤十字に次ぐ世界で第二の規模を持つ人道支援NGO組織。

## 歴代教区長追悼ミサ

[略年表へ戻る](#)

キリシタン禁制の高札が撤去された翌年の1874年（明治7年）11月に献堂式が行われた築地教会は東京で最初のカトリック教会であり、1920年（大正9年）に関口教会に司教座が移動するまでは東京教区のカテドラルであった。そのような歴史的背景にちなんで、毎年夏の前に築地教会で歴代教区長追悼ミサが行われている。

東京教区の歴代教区長は下記の通り。

初代	ピエール・マリー・オズーフ大司教（パリ外国宣教会）	1891年 - 1906年
2代	ピエール・ザヴィエ・ミュガビュール大司教（同）	1906年 - 1910年
3代	フランソワ・ボンヌ大司教（同）	1910年 - 1912年
4代	ジャン・ピエール・レイ大司教（同）	1912年 - 1927年
5代	ジャン・アレキシス・シャンボン大司教（同）	1927年 - 1937年
6代	ペトロ 土井辰雄枢機卿	1937年 - 1970年
7代	ペトロ 白柳誠一枢機卿	1970年 - 2000年
8代	ペトロ 岡田武夫大司教	2000年 - 2017年
9代	タルチシオ 菊地功大司教（神言修道会）	2017年 -



出典：東京教区ニュース第404号

# 森一弘名誉司教 帰天

[略年表へ戻る](#)

## パウロ森一弘名誉司教 略歴



- **1938年10月12日**  
神奈川県横浜市に生まれる。
- **1954年 4月 3日**  
栄光学園聖堂にて受洗
- **1967年3月11日**  
司祭叙階（ローマにて）
- **1977年8月～1981年3月**  
関口教会助任
- **1981年4月～1985年1月**  
関口教会主任
- **1984年12月3日**  
東京教区補佐司教任命
- **1985年2月23日**  
司教叙階
- **2000年5月13日**  
東京教区補佐司教退任
- **2023年9月2日**  
帰天

**役職等** 1985年11月～2021年6月  
真生会館理事長



## 東京教区補佐司教にアンドレア・レンボ神父を任命

[略年表へ戻る](#)

### アンドレア・レンボ (Andrea Lembo) 補佐司教 略歴



- **1974年5月23日**  
イタリア共和国ロンバルディア州ベルガモ県  
トレヴィーリオに生まれる
- **1974年11月24日**  
トレヴィーリオ聖ペトロ使徒教会にて受洗
- **2003年6月7日**  
フィリピンにて助祭叙階
- **2004年6月12日**  
ミラノ司教座聖堂にて司祭叙階
- **2009年4月**  
来日
- **2011年4月～2012年3月**  
板橋教会助任司祭
- **2012年4月～2017年3月**  
習志野教会助任司祭
- **2014年4月～2021年2月**  
一般社団法人船橋学習センター「ガリラヤ」  
副理事長
- **2017年4月～2023年3月**  
府中教会主任司祭
- **2017年5月～**  
カトリック・ミラノ外国宣教会管区長
- **2021年2月～**  
一般社団法人船橋学習センター「ガリラヤ」  
理事長
- **2021年6月～**  
公益材団法人真生会館理事長
- **2023年9月16日**  
東京教区補佐司教に任命

# シノドス総会・第1会期終了

[略年表へ戻る](#)



今回のシノドスのメンバーは、枢機卿、司教、司祭、修道者、信徒、またエキュメニカル使節や、その他の招聘された使節・代表など合わせて464人。日本からは、議長代理として、セルヴィ・エヴァンジェリー会員の西村桃子さん、日本の司教団の代表として、東京教区大司教・日本司教協議会会長の菊地功大司教、専門家およびファシリテーターとして、ベリス・メルセス宣教修道女会会員のシスター弘田鎮枝の3名が参加した。



カリタスの業について  
全体発表を行う菊地大司教





St. Ignatius Church, Tokyo  
— Celebrating 25 years —

**聖イグナチオ教会のあゆみ**  
～現聖堂献堂25周年記念 略年表～

**詳細解説**